かがやき

令和５年　６月　１４日（水）
多摩市立連光寺小学校
特別支援教室　かがやき学級
学級通信　　ＮＯ．３

「一言スピーチ」で話してみる。「共有」して深まる相手への意識。

かがやきの小集団指導の中に「一言スピーチ」というものがあります。これはいくつかのテーマを決め、そのテーマに沿って話をするものです。もちろん子供たちの中にはこうした自分の好みや感覚について話すことが得意な子もいれば、苦手な子もいます。最初はテーマをごくごく簡単なものから始めます。「好きなお菓子は？」「好きなゲームは？」いわゆる好きなシリーズです。そして少しずつ話をしていく中で共通点が見つかることがあります。「あ、ぼく（わたし）と一緒だ！」「私も同じ」こうなるとそこに「共有」の気持ちが生まれます。「共有」の気持ちが集団に生まれることで相手に対しての意識が出てきます。小集団の中で自分のことを話す（開示する）ことは一定の関係性が必要です。こうした相手のとの「共有」するという経験を重ねていくことで、相手を「知っている人＝仲間」と意識でき、集団内での関係性を深めていくことができます。こうした関係性は同時に「安心感」も生みますね。最初は発言に時間がかかったり、なかなか言葉も絞り切れなかったりすることもありますが、回数を重ねていくことで表情や気持ちも交じりながらトークに発展していきます。少しずつ自分を知ってもらえたり相手を知っていったりする中でお互いの関係性を育てているところです。

「感覚」のちがいからくる得意、不得意。自分の方法を探してみる

学校での学習活動の中で子供たちは課題によって様々な自分の感覚を総動員して学習に取り組んでいます。ここでお話する「感覚」はいわゆる五感（・視覚・味覚・聴覚・嗅覚・触覚）を基にしたものとなりますが、先日定期的に学校でお世話になっている臨床心理士の先生との会話から「なるほどなあ～」と膝を打った話を紹介します。子供たちといわゆる勉強の話をしているときに「苦手」とする内容の話になることがあります。例えばそれは、黒板の内容をノートに書き写すことであったり先生から出た指示を自席で姿勢を保持しながら集中して聞くことであったり様々です。今回は生活科や理科で多く行われる「観察」の話でした。自分たちで育てている植物を見て観察をする場面。ある子がどうしても描けないと活動を止めてしまいました。当然、「よおく見て」「葉っぱの形や茎を近くで見ていいんだよ」等の会話が先生との間で展開されていきます。ただどうしても描けない。しばらくやるやらないの駆け引きが続きました。さてどうしたものか。そこで担任の先生はタブレット端末で観察す植物を撮影し二次元の写真を描くように指示したとのこと。すると、その子は何とかその写真を見て観察のイラストを描くことができたということでした。心理士の先生によると、3次元のものを2次元にしていく作業（見て紙に描く）は人によっては難易度の高い作業になることがあり、どの部分をフォーカスしてイラストに落とし込むかわからなくなることもあるらしいとのこと。なので、絵や写真という形にすることで固定した被写体にもなり課題に取り組めることができた。この話を聞いて、この自分の状態を子供の感覚で説明していくのは低学年くらいだと難しいだろうなあと感じました。（人によっては「うざい」「めんどくさい」となってしまうこともあるだろうなあ～）ただ、この担任の先生の機転により、課題をクリアできたことはその子にとっても担任の先生にとっても良い結果となったのでこれはこれで丸く収まってよかった話になったと思いました。個々の感覚やその感覚の成長はバラバラでもあります。その中で「学校」では平均をとりながら学習課題に取り組むことを求められるのですが、その方法は多様であっていいこと。柔軟にクリアしていく発想が大切なことを改めて考えた話でした。